

## 【審査論文】

## 二次創作作品の個別性と原作との同一性： 映画 *Peter Pan* と原作 *Peter and Wendy* を具現する仮構的原型（2）

黒田 誠

### Identity and Individuality of Alternative Fictions: Fictional Archetype and Equivalency of A Movie to the Original Novel (part 2)

Makoto KURODA

## 要旨

映画作品*Peter Pan*を対象にして、原作の文学作品*Peter and Wendy*との存在物としての同等性と差異性の判別条件となる諸要素を様々なシーンやストーリーの詳細項目の対比から抽出して、作品名の固有名詞概念に関する同一性判断の外延範囲の拡張を要求すると思われる存在論的主題を検証する。概念記述である観念小説と映像記述である映画作品の間の種々の位相変換の過程を辿ることにより、量子的多世界解釈における平行宇宙において指摘し得た間世界的存在同一性と類比的な、意味空間における相当の同等性と可能態における分岐的発現可能性に対する示唆として仮構記述の指示を評価し、人格や現象において指摘し得ると同様の多宇宙的存在発現様態が映像的仮構の中に平行記述として参照されていることを示す。

キーワード：二次創作、同一性、仮構存在、映画、観念小説

映画作品*Peter Pan*の原作である小説*Peter and Wendy*は、想起されたあらゆる矛盾撞着が共存する不可能世界であるネヴァランドを舞台とし、妄想を実人生として生きるゲームであるメイクビリーブの達人のピーター・パンを主人公とする、現象世界的束縛を超出した心理的位相空間が展開する純観念的仮構であった。その主題的特質は、登場人物の姿を擬装した作者が仮想的な読者との間の対話を通して、双方向的な情報伝達からなる語りの行為の中に思念世界を構築することにより、仮言命題の束として仮構世界の記述を図る過程を明示する、メタフィクションの機構にあった。仮構世界と現象世界とのそれぞれにまたがって存在し、あるいは各々の可能世界を現出せしめる特異点ともなっている意識存在の属質を、原作と種々の二次創作作品を通貫してあることが想定される原存在的メタ“個別性”との関連から捕捉する視座は、現象世界と無数の平行世界を連続的に俯瞰する多世界理論的な形而上的思念と同調するものである。我々意識存在の思念の基底に集合的に共有されたものとして仮定されるばかりでなく、空間や時間や質量をも具現する潜勢力でもある原形質的位相の情報特質は、“仮構世界記述”という概念でのみ捕捉することができるメカニズムを“語り”の超越的な世界創成機構の中に再探索していくことによって、改めて把握することが可能となると思われるからである。

原作の*Peter and Wendy*にあった、地下の子供達の家でウェンディがロストボーイズ達を相手にお話を

するシーンは、映画*Peter Pan*では全面的に背景を改変して、ウェンディが海賊船の甲板で海賊の手下達に対してお話をする場面に置き換えられている。原作が示唆していた、聴き手の反応を確かめながら有機的にお話世界が進展して行く「語り」の機構の複合的な可能世界構築機能に加えて、映画*Peter Pan*では知性偏重の暴君であるフックの威圧を受けながら、ウェンディの物語のお話が進展する様が描かれることとなっている。フックに命じられて彼女が語るピーター・パンのお話は、以下のように進められている。

Once upon a time.... There was a boy named Peter Pan who decided not to grow up.... So he flew away to the Neverland, where the pirates are.

昔々、……ピーター・パンという男の子がいました。ピーターは大きくなるのを止めることにしました。……そこでピーターは、ネヴァランドに飛び去りました。そこには海賊達がありました。

ここでウェンディの語るお話の中に自分自身が登場することに反応して、聴き手の一人が語りの行為に参入する。この場面でメタフィクションの機構を支える興味深い役割を果たすのは、フックの手下の凶悪な海賊達の一人のヌードラーである。

Was one of them pirates called Noodler? / Yes. / Captain, did you hear? I am in a story.

海賊の中にヌードラーって奴はいませんでしたかい? / いたわ。 / 船長、聞きましたかい? 俺がお話の中に出てきてる。

ところがヌードラーのこの台詞は、原作ではロストボーイズの一人のトゥートルズによって語られていたものであった。原作と映画*Peter Pan*では、ロストボーイズ達と海賊の存在が対照的に入れ替わっているのである。原作*Peter and Wendy*が描く地下の家でのウェンディのお話の場面は、子供達の身勝手さを語り尽くす内容になっていた。原作の語り手が共感を求めて語りかけているのは、紛れも無く世の辛苦を知り尽くし、我が儘勝手な子供達に愛想を尽かしている大人達なのであった。映画作品*Peter Pan*が共有することを避け、別個の次元軸に置換した属性要素があることは以下の記述から読み取ることができる。

“Oh dear, oh dear,” sighed Wendy. “Now these three children had a faithful nurse called Nana; but Mr. Darling was angry with her and chained her up in the yard, and so all the children flew away.” “It’s an awfully good story,” said Nibs. “They flew away,” Wendy continued, “to the Neverland, where the lost children are.” “I just thought they did,” Curly broke in excitedly. “I don’t know how it is, but I just thought they did!” “O Wendy,” cried Tootles, “was one of the lost children called Tootles?” “Yes, he was.” “I am in a story. Hurrah, I am in a story, Nibs.”

“Hush. Now I want you to consider the feelings of the unhappy parents with all their children flown away.” “Oo!” they all moaned, though they were not really considering the feelings of the unhappy parents one jot. “Think of the empty beds!” “Oo!” “It’s awfully sad,” the first twin said cheerfully. “I don’t see how it can have a happy ending,” said the second twin. “Do you, Nibs?” I’m frightfully anxious.” “If you knew how great is a mother’s love,” Wendy told them triumphantly, “you would have no fear.” She had now come to the part that Peter hated. “I do like a mother’s love,” said Tootles, hitting Nibs with a pillow. “Do you like a mother’s love, Nibs?” “I do just,” said Nibs, hitting back. “You

see,” Wendy said complacently, “our heroine knew that the mother would always leave the window open for her children to fly back by; so they stayed away for years and had a lovely time.”

p. 100-1

「やれ、やれ。」ウェンディは溜息をつきました。「さて、この3人の子供達には、しっかり者の子守りがついておりました。ナナという名前です。けれどもダーリング氏はナナに腹を立てて、庭に鎖で繋ぎ止めてしまいました。そして子供達はみんな逃げ出したのです。」「これって滅茶苦茶、面白い話だな。」ニブズが言いました。「子供達は、ネヴァランドへと逃げ出したのです。」ウェンディは続けました。「あの、ロストボーイズ達のいるネヴァランドです。」「そうだったんだ。」カーリーが興奮して口を挟みました。「何故だか分からないけど、ロストボーイズが出て来るはずだったんだ。」「ねえ、ウェンディ。ロストボーイズの中には、トゥートルズという子がいなかった？」「その通り、いたのよ。」「僕は、お話の中に出て来るんだ。やったね、どうだい、ニブズ。」「でもね。子供達がみんな逃げ出してしまった可哀想なお父さんとお母さんのことも考えてあげてね。」「うーむ。」子供達は全員うなるように声をあげました。でも実際には、両親の気持ちなんてちっとも考えてなんかいなかったのです。「子供達のベッドが、空っぽになっちゃってるのよ。」「うーむ。」「とても悲しいことだね。」双子の兄がにこやかに言いました。「これで、ハッピー・エンドになるのかな？」弟が言いました。「どう思う？ニブズ？」「滅茶苦茶、心配だね。」「でもね、お母さんの愛情がどれだけ素晴らしいものかさえ知っていれば、」ウェンディは勝ち誇ったように言いました。「心配することなんて、ちっともないのよ。」ウェンディのお話は、ピーターが一番嫌いなあたりに来ていました。「お母さんの愛情は、とても素敵だと思うな。」トゥートルズが言って、枕でニブズをひっぱたきました。「君はお母さんの愛情、好きかい？ニブズ。」「そりゃあ、大好きさ。」ニブズは言って、叩き返しました。「娘は、お母さんがいつも、みんなが帰ってこられるように家の窓を開けておいてくれることを知っていたの。だからみんなは、何年も家を留守にして、とても楽しく過ごしたの。」ウェンディは安心しきった様子で続けました。

語り手のウェンディは、物語を語る自分自身と聴き手である弟達の有様をお話の中に語り、さらに聴き手はウェンディのお話の中に自分自身が登場することを言及して語りの行為に参入する。さらに語り手と聴き手の双方は、この後物語の中の将来における自分たちの姿を語りの中心主題として共有し、現在の自分達の感想と希望を交えながら物語の終結を予見するのである。お話を語るものとそのお話を聞くものとの間のやりとりを通じて、お話の世界が語り手と聞き手双方の意識の重合部分の中に有機的に生成して行く様が語られている。ピーターという存在と、そしてお話を語ったり聞かされたりする“自分”という意識やその自分を取り巻く世界というそれぞれの実体あるいは現象もまた、このお話自身と同様に個々の想念の重合部分の中に浮動しつつ形作られて行くものなのである。原作 *Peter and Wendy* が開拓したこの仮構記述の新機軸の手法は、2次創作作品 *Peter Pan* において微妙に軸線を入れ替えることによって、メタフィクション的テーマ性を凝縮していくことになるのである。

原作 *Peter and Wendy* においては、現実世界に生起した事象を始まりと終わりで区切って断片化することによって、一個の完結した仮構として語ろうとするものではなかった。仮構として語られた場面がそのまま現実世界の一部を言及し、仮構からの現実に対する参照が語られる構図を採用することにより、結局は現実世界の全てをあるがままに仮構世界に取り込もうとする、巧妙な仕掛けが隠されていたのである。このような仮構内仮構の暗示するメタ構造性は、部分が反転的に全体を包摂するホログラフィー構造を示唆して、取り分け興味深いものであった。空間的座標性における集合の包含関係を超出したメタ界面にお

ける全体性の世界構造を把握する視点が、そこに暗示されているようにも思えるからである。この構造特質は、原作*Peter and Wendy*においてはダーリング夫人の保有する不可思議な特性として、いくら開けても中から同じ形の箱が出て来る「心の中の小箱」という発想の記述と照応していたものであった。

現実と仮構の間の指示関係を攪乱して主客の位相を入れ替え、現実の全てを上位の連続体としての仮構記述の中に取り込もうと企図する原作*Peter and Wendy*の採用した構図は、海賊船におけるウェンディとフックのお話の語りに関するやりとりを通じて、映画*Peter Pan*においても仮構内仮構を物語るメカニズムの変化形として効果的に導入されている。そしてこの作劇手法は、この2次創作作品においてさらに捻転した反映記述を施されて、仮構作品としての独自の透視図を決定する特有の消失点さえも創出する結果になっているのである。ウェンディの語るお話の途中で強引な干渉を企てて、ピーター・パンの秘密についてお話をするを要求するフックに応じて、ウェンディは語りを進める。

He liked my stories. / What stories? / Cinderella. Snow White. Sleeping Beauty. / Love Stories? / Adventures in which good triumphs over evil. / They all end in a kiss. A kiss. He does feel. He feels about you. She told him stories. He taught her to fly. How? / You just think happy thoughts. They lift you into the air. / Alas, I have no happy thoughts. / That brings you down. / How else? / Fairy dust. You need fairy dust.

ピーターは私のお話に耳を傾けるの。／それはどんなお話かな？／シンデレラに白雪姫に眠れる森の美女。／恋愛ものか？／善が悪を打ち負かす冒険物語。／どれも皆お終いはキスで終わるな。キスカ。奴にも感情はあるのだな。奴はお前のことを気にかけている。お前は奴にお話をしてやり、奴はお前に空の飛び方を教えた。それはどうやってだ？／ただ楽しいことだけを思い浮かべるの。そうしたら自然に体が宙に浮く。／だが、俺には楽しいことなぞ思い浮かべられない。／だからあなたは地面に墜ちるの。／他に手はないのか？／妖精の粉だよ。妖精の粉を振りかければいい。

ウェンディとフックは仮構世界に関する双方向的言及を試みながら、実は自分たちの現象世界の未来像を確定する試行を模索しているのである。お話の進行を決定する重要案件となるフックの質問に中々答えようとしないウェンディに替わって、身の危険を感じた彼女の弟がフックに大事な秘密を語ってしまう。こうしてウェンディは、ピーターから教わった空を飛ぶための秘訣を敵対するフックに知られてしまうことになる。その結果映画*Peter Pan*には、原作には記述の無かったフックの飛行シーンと、ピーターにこの少年が本来知ることのなかった“悲しい思い”を味わわせることにより、戦いを有利に進めようと狡猾な戦術家の船長が画策する新たな場面が導入されることになる。フックにこの思いつきを与えたのはウェンディの言葉であり、その思いつきを実行に移すきっかけをもたらしたのもウェンディの存在であった。

What of Pan? Will unhappy thoughts bring him down? / He has no unhappy thoughts. / How if his Wendy walks the plank?

ではパンはどうなんだ？悲しい思いは奴を飛べなくするのか？／ピーターは悲しい思いなんて知らないわ。／では、ウェンディが板歩きの刑を受けたらどうなるかな？

この後まもなく海賊船に姿を現したピーターとの戦いの中で、フックはティンクの妖精の粉を身に浴び、ピーターのやり方に倣って宙に浮揚することとなる。これは原作には全く言及の無かった新展開であるが、



ピーターとフックの間の対照的に分離してはいるものの本性においてはむしろ堅固な同一性を維持する両者の関係性を、ウェンディの存在を軸にして見事に照応させることになっている。フック自身に染み付いた宿痾である憂鬱の念を、ピーターに転嫁する作戦が実行されることになるからである。束の間憂鬱の念から解放されたフックは自らを3人称で呼び、高らかに宣言するのである。

It's Hook! He flies! And he likes it. フックだぞ！空を飛んでいるぞ。中々気に入ったぞ。

こうしてフックは、永年の懸案であったピーターの“存在の謎”<sup>1</sup>を自分なりの流儀で解き明かすことにより、この難敵を打ち負かす戦略の糸口を掴むことになる。フックの採用した心理戦においては、ウェンディの存在とお話の語りの機構が巧みに利用されることになっていたのである。フックは手中にしたこの新機軸の戦法を、ピーターを相手にさらに効果的に発展させようと試みる。フックは、今度はピーターを相手にウェンディの登場するお話を語りかけるのである。

I know what you are. / I am the best there ever was. / You are a tragedy. / Me? Tragic? / She was leaving you, Pan. Your Wendy was leaving you. Why should she stay? What have you to offer? You are incomplete. She'd rather grow up than stay with you. Let us now take a peep into the future. What's this I see? 'Tis the fair Wendy. She's in her nursery. The window's shut.

俺はお前の正体を知っているぞ。／僕はこれまでに最高の男の子さ。／お前は悲劇だ。／僕が？悲劇だって？／ウェンディはお前を見捨てようとしていたぞ、パン。お前のお気に入りのウェンディがな。一緒になんかいるものか。お前がウェンディに何を与えられる？お前は出来損ないだ。お前と一緒にいるよりは、大きくなる方がいいのさ。ちょっと未来を覗いてみるか。これは何だろうな。美しいウェンディじゃないか。ウェンディは子供部屋にいるぞ。窓は閉められている。

フックはピーターとの永年の抗争に片を付けるべき決戦の中に、やはり“物語”の語りの要素を全面的に導入するのである。夢想のなかに浮かんだ思念をそのままあるがままの事実として受け入れるその仕組みは、ピーターの得意なmake-believeの世界そのものである。そこでピーターの弱味をつく巧みな精神攻撃を仕掛けるフックが、ピーターを見捨てて大人になってしまったウェンディの仮想上の姿を語る際に用いた言葉が、「ちょっと未来を覗いてみよう。」であった。彼の採用したこの仮構記述的創案は、思惑通り宿敵に対して重大な効果を及ぼすことになる。しかしこの極めて印象的な台詞は、原作*Peter and Wendy*においては、映画*Peter Pan*とは全く異なる場面で、しかもフックではなくウェンディ自身が口にしたものだったのである。子供達の地下の家で、ロストボーイズ達のお母さんの役割を演じて成長した後の自分達をお話の中で物語る際に用いられたのが、「ちょっと未来を覗き込んでみましょう」であった。

“Let us now,” said Wendy, bracing herself up for her finest effort, “take a peep into the future”; and they all gave themselves the twist that makes peeps into the future easier. “Years have rolled by, and who is this elegant lady of uncertain age alighting at London Station?”

p. 101

「さて、それでは、彼等の未来の姿を覗いてみましょう。」ウェンディは言う、両腕で自分の体を抱きしめました。そして子供達も全員が、未来を覗くのが容易くなる一ひねりを自分の体に加えました。「年

月が過ぎ去りました。ロンドンの鉄道駅で汽車から降り立った、この優雅な淑女は一体誰でしょう？」

映画*Peter Pan*では、海賊船上のフックとピーターの演じる最後の戦いに関する描写として、原作*Peter and Wendy*とは全く異なった場面が展開されることになる。それはフックが主導する知的な心理戦であり、対話を通して物語られたmake-believeのゲームの実演なのである。

I'll open it! / I'm afraid the window's barred. / I'll call out her name. / She can't hear you. / No. / She can't see you. / Wendy. / She's forgotten all about you. / Stop. Please! Stop it! / And what is this I see? There is another in your place. He is called husband.

そんな窓、開けてやるさ！／残念ながら窓には門がかかっている。／ウェンディの名前を呼ぶさ。／お前の声は聞こえない。／嘘だ。／お前の姿も見えない。／ウェンディ。／ウェンディはお前のことなど、忘れている。／止めてくれ。お願いだから止めてくれ！／そして、これはなんだろうな。お前の替わりに別の人がいるぞ。そいつは夫と呼ばれている。

ウェンディのお陰で天啓を得て採用した戦術の効果に十分な手応えを得て、自らの勝利を確信したフックは、勝ち誇ってピーターに最後の通告をする。

You die alone and unloved. Just like me.

お前は誰からも愛されることなく、一人で死ぬのだ。俺と同じようにな。

フックの勝利宣言は、同時に倒すべき仇敵と勝者たるべき自分自身との存在同定宣言でもある。これは原作*Peter and Wendy*におけるフックの最終的な敗北場面を見事に反転させたものになっている。原作ではフックは最期に及んでピーターの正体と彼の“存在の謎”の両方を解き明かす啓示を得る。それはピーターが紛れも無く分極生成の結果誕生した自分自身の影であり、フックには裏の自我との合一の機会が決して得られることはなく、霊性の破綻による破滅を自分の運命として受け入れざるを得ない、という苛酷な認識に結びつくものであった。以下の記述がこのあまりにも熾烈な原作の主題を語っていたのである。

Hitherto he had thought it was some fiend fighting him, but darker suspicions assailed him now. “Pan, who and what art thou?” he cried huskily. “I'm youth, I'm joy,” Peter answered at a venture, “I'm a little bird that has broken out of the egg.” This, of course, was nonsense; but it was proof to the unhappy Hook that Peter did not know in the least who or what he was, which is the very pinnacle of good form

p. 133

これまではフックは、自分が戦っている相手が何か化け物のようなものだと思っていた。しかし今、さらに恐ろしい疑惑が彼を襲ったのである。「パン、一体お前は何物なのだ？」かすれた声でフックは尋ねた。「僕は若さだ、僕は歓喜だ！」ピーターは、当てずっぽうに答えた。「僕は、卵から孵ったばかりの雛鳥だ。」勿論これは、意味をなさない答えであった。しかしこの返答が、ピーターが自分が一体何物なのか、一切全く知らないという事実を示しており、それこそがグッドフォームの規範に他ならないことは、哀れなフックには明白であった。

峻厳な自意識に捕われていかにも自らのグッドフォームを肯んじ得ない精神の閉塞が、フックという人格を定義付ける存在同一性の基本条件であり、同時にまたピーターという不可解な神秘の生成因でもあったのである。映画 *Peter Pan* では、この後の展開にもやはりウェンディが重要な役割を担うことになる。死に行くものに対する最後の恩寵として、ウェンディはピーターに彼女の大事な“指貫”を手渡す許可をフックに願い出るのである。ウェンディは甲板に横たわるピーターに寄り添って語りかける。

Peter. I'm sorry I must grow up. But this is yours.

ピーター、ごめんなさい。私は大きくなっちゃうの。でも、これはあなたのものよ。

この映画の冒頭部分でウェンディとピーターの会話を通して導入されていたキスと指貫の交換記述は、このクライマックスの場面でフックの目を欺く伏線として機能することになっていたのである。フックは驕り昂ってウェンディに彼女の“指貫”の授与を許可する。

It is just a thimble. / How like a girl. By all means, my beauty, give Peter Pan your precious thimble.

これはただの指貫よ。／なんとも女の子らしい。よろしい、大事な指貫をピーター・パンに渡してやるがいい。

ウェンディはピーターに彼女の“指貫”を渡す。しかしジョンとマイケルには、ウェンディがピーターに与えようとしているものが、本当は“キス”であることが分かっている。

This belongs to you, and always will. / That was no thimble. / That was her hidden kiss.

これはあなたのものよ。ずっといつまでも。／あれは指貫なんかじゃない。／あれはウェンディの秘密のキスだ。

ピーターは、ウェンディの与えたキスのお陰で、失っていた力を取り戻すことができる。攻守は逆転して、フックが口火を切った憂鬱と絶望の効果を巧みに利用した心理戦は、ピーターの機転によってこの戦法を導入したフック自身に染み付いた反省的自意識を備えた教養人の心を拘束する憂鬱の念を焦点にした make-believe のゲームとなる。そして戦いの終局は、やはり意識による現象の具現化の要素が全てを支配することになっているのである。フックの自意識が反転的描像に従って記述された変換試行の結果である。

I have won! / You are old. / But I won! / Old. And alone. / Alone. No! I won! I won! I... /

Done for. / Happy thoughts. Happy thoughts. Ripping! Killing! Killing! Choking! Lawyers! Dentists!

俺は勝っていた！／お前は年寄りだ。／でも、俺の勝ちだ！／年寄りで、孤独だ。／孤独だと。違う。

勝った、俺は勝った！／終わりだ／楽しいことを、何か楽しいことを。切り裂き！殺人！絞殺！弁護士だ！歯医者だ！

窮地に陥ったフックは様々の残虐行為を思い浮かべ、自らの快の念を回復させる何かを思い浮かべようと悪戦苦闘する。しかしこの場に及んで彼の心に浮かぶものは、ひたすらに痛苦と苦難ばかりなのである。ピーターとは異なりフックには、あるがままの自分を客観的に見つめる醒めた自意識があるからだ。

Old! Alone! Done for! / Killing! Pus! Children's blood! Puppy's blood! Bunny's Blood. Disease! /  
Old! Alone! Done for! / Kittens dashed on spikes! No! Spiders, cockroaches, snakes. Venom and  
pox. White death. Black death! Any death! A nice cup of tea!

年寄りだ！孤独だ！終わりだ！／子猫を殺す。子供を流血させる！猫の血、兎の血、伝染病！／年寄り  
だ！孤独だ！終わりだ！／串刺しの子猫！駄目だ！蜘蛛にゴキブリに蛇。毒に乾癬。白死病！黒死病！  
何でもいから病氣！おいしいお茶！

求道的に体制に抗う反逆者フックは、自らに喜楽をもたらすであろうものとして、他者に加えるおぞまし  
い苦痛をしか思い浮かべることができない。しかし最後に“おいしいお茶”を口にしたところで、反逆者と  
しての彼の存在理由は破綻する。フックは終に自らの破滅を客観的事実として受け入れる。

Old! Alone! Done for! Old! Alone! Done for! / Old. Alone. / Done for! / Done for.  
年寄り！孤独！終わりだ！／年寄りだ！終わった。／終わりだ！／終わった。

映画*Peter Pan*ではピーターとの戦いで惨めな敗北を喫し、鰐に吞まれて最期の時を迎えようとしている  
フックに対して、子供達は冷徹に声を揃えて「終わりだ！」(Done for!) と叫ぶ。一時はフックに心を奪  
われたウェンディも、他の子供達と変わる事無く唱和して、この残酷な宣言に加わっていた。ところが原  
作*Peter and Wendy*においては、この「終わった」という敵意に満ちた呪いの言葉は、語り手である作者  
によって、現実世界に復帰したネヴァランドの子供達に対する情け容赦のない総括として用いられていた  
のである。作者の呪詛が子供達の全員に向けられているばかりでなく、かつては作者の偏愛の対象であっ  
たダーリング夫人にまでも及ぼされているのは、とりわけ印象的な事実である。映画*Peter Pan*において  
は割愛されていた、原作*Peter and Wendy*の興味深いエピローグの記述を確認してみることにしよう。

All the boys were grown up and done for by this time; so it is scarcely worth while saying anything  
more about them. You may see the twins and Nibs and Curly any day going to an office, each carrying  
a little bag and an umbrella. Michael is an engine-driver. Slightly married a lady of title, and so he  
became a lord. You see that judge in a wig coming out at the iron door? That used to be Tootles. The  
bearded man who doesn't know any story to tell his children was once John. Wendy was married in  
white with a pink sash. It is strange to think that Peter did not alight in the church and forbid the  
banns. Years rolled on again, and Wendy had a daughter. This ought not to be written in ink but in  
a golden splash. She was called Jane, and always had an odd inquiring look, as if from the moment  
she arrived on the mainland she wanted to ask questions. When she was old enough to ask them they  
were mostly about Peter Pan. She loved to hear of Peter, and Wendy told her all she could remember  
in the very nursery from which the famous flight had taken place. It was Jane's nursery now, for her  
father had bought it at the three per cents. from Wendy's father, who was no longer fond of stairs.  
Mrs. Darling was now dead and forgotten.

pp. 149-150

この頃にはもう、他の男の子達もみんな救いようのない大人になっていた。だからこれ以上語るべき  
ことは何もない。双子もニブズもカーリーも、鞆と傘を持って仕事に出かける姿を何時だって見ること



ができる。マイケルは、車の運転手になった。スライトリは称号を持った奥方と結婚し、今は貴族だ。鉄製の扉の前に、鬘を被った裁判官様の姿が見えるだろうか？あれは以前トゥートルズだったお方だ。子供に何一つお話をしてやることもできない、髭を生やしたあの紳士は、以前ジョンだったお人だ。

ウェンディは、白いドレスにピンクのサッシュを付けて結婚式を挙げた。ピーターが教会に舞い降りて異議申し立てをしなかったのは、不思議だ。再び年月が流れた。ウェンディには娘が生まれた。これはインクではなく金色のしぶきで書き留めるべきだろう。

ウェンディの娘はジェーンと名付けられた。この子は、現実の世界にやってきたその瞬間から、尋ねてみたいことが一杯あるとでも言うかのように、いつも物問いたげな表情をしていた。そして、ジェーンがその質問をすることができるほど大きくなった時、彼女が尋ねたのは、大部分がピーター・パンについてのことだった。ジェーンはピーターのお話を聞くのが大好きで、ウェンディは、自分達があの運命的な脱出を行った子供部屋で、覚えている限りのことを娘に語ってやった。その部屋は、今はジェーンの部屋だった。ジェーンのお父さんは、3パーセントの利息で、もう階段を昇るのがつらくなったウェンディのお父さんからこの家を買取ったのだった。ダーリング夫人はもう亡くなっていて、すっかり忘れられてしまった。

原作 *Peter and Wendy* では、語り手である作者はダーリング夫人を含めて全ての登場人物達に対してよそよそしい冷笑的な態度を装って彼等の動向の記述を進めるが、唯一作者の内心の共感を見透かすことができたのは、実は美学に殉じた権力に抗う反逆者キャプテン・フックだった。しかし映画 *Peter Pan* のクライマックスにおいては、全てを失墜した滑稽な老人として極悪な海賊船の船長フックの最期を描くこととなっているのである。

しかし仇敵であったフックの破滅を確信して安心しきった子供達の背後で、いきなり先程鰐に吞まれた筈のフックの声が響き渡る。

Brimstone and gall. Silence, you dogs, or I'll cast anchor in you.

犬共、静かにしねえか。さもないと、この鉤爪をお見舞いしてやるぞ！

驚いた子供達が振り向くと、その不気味な声の正体はピーターであった。ピーターにとっては悪戯の機会を逸するべき時は、一瞬たりとない。ピーターのいつもながらの機転に思わず感心したウェンディは叫ぶ。

Oh, the cleverness of you! まあ、ピーターったら、なんて賢いの。

しかしながら主人公の少女のこの賞賛の言葉もまた、原作 *Peter and Wendy* においては全く異なる場面で、しかもピーター自身によって語られたものだったのである。子供部屋に忍び込んでようやく影を取り戻したのはいいが、どうしても我が身から離れた影を体に着けることができずに床に座り込んで泣いていたピーターに、ウェンディが力を貸して針と糸を用いて影をピーターの足先に縫い付けてやった時に、全てを自分一人で成し遂げたつもりになって思わずピーターが叫んだのがこの台詞であった。

Oh, the cleverness of me! 僕って、なんてすごいんだ！

この台詞は、原作*Peter and Wendy*と映画*Peter Pan*においてそれぞれの主人公が語ることとなっており、そしてその対象は双方ともピーター・パンを指示するものであったのである。

映画*Peter Pan*の結びの場面では、現実世界に帰還したロストボーイズ達のそれぞれが引き取り手を得て、幸せな結末を与えられる様が導かれている。マイケルが強奪してきた海賊船の宝物が扶養家族を増やしてしまったダーリング家の家計を支えることになるという、いかにも都合のよいエピソードまでが付加されている。ナレーションの声は、以下のように物語の締めくくりを語る。

There could not have been a lovelier sight. But there was none to see it... except a strange boy who was staring in at the window. Peter Pan had countless joys that other children can never know. But he was looking at the one joy from which he must be for ever barred.

これ以上素敵な光景など、他にあったでしょうか。でもそれを目にしているのは、窓辺に佇んでいる一人の少年だけでした。ピーター・パンは、他の子供達を知ることもない沢山の喜びを経験してきました。でも今彼が目にしているのは、彼には永遠に手に入れることのできない一つの喜びでした。

ウェンディ達の無事な帰還を見届けて、一人残されたピーターはつぶやく。

To live would be an awfully big adventure. 生きることって、途轍もない冒険なんだな。

生死を超越した神的位相の保持者であるピーターが致死性の存在の魅力について語るこの言葉は、当然ながら原作にはなかった台詞である。人であり女であるこの映画の主人公ウェンディのためにピーターが語ってくれた、あまりにも有名な彼の台詞の反転記述であった。一人で立ち去ろうとするピーターにウェンディは別れの挨拶をして、再びウェンディに会いに来てくれるように頼む。ピーターは決して彼女のことを忘れないことを誓う。しかし映画*Peter Pan*の最後の場面は以下のナレーションで締めくくられている。

But I was not to see Peter Pan again. Now I tell his story to my children. And they will tell it to their children. And so it will go on. For all children grow up... except one.

でも私は、再びピーターの姿を見ることは無かったのです。今私は、ピーターのお話を私の子供達に聞かせてあげます。そして子供達は、その話をまた自分の子供達にしてあげるのです。なぜなら子供達はみんな、大きくなるのですから。たった一人を除いて。

最後のこの場面で、この映画のナレーションを務めていたのが成長したウェンディであったことが判明する。この映画作品*Peter Pan*は、お話をすることが好きな少女ウェンディの話を、大人になった話し手のウェンディが物語る一つのお話だったのである。しかし原作*Peter and Wendy*の終結部分あたりの記述は、読者に容易に心の安らぎを得させてはくれない、特有の屈折と偏差を含んだものとなっていたのである。永遠の子供ピーター・パンを描く仮構作品としてのアイデンティティを成立させる基本条件ともなる重要要素が、実はダーク・ファンタジーとしてのこの不気味な傾向性であった。それはウェンディ達3人がダーリング家に帰還する直前の場面の辺りから、既に暗示されていたのである。子供部屋ではダーリング氏に頼まれてダーリング夫人がピアノを弾き始め、ダーリング氏が眠りに落ちたところであった。

... and she went into the day-nursery and played, and soon he was asleep; and while he slept, Wendy and John and Michael flew into the room.

Oh no. We have written it so, because that was the charming arrangement planned by them before we left the ship; but something must have happened since then, for it is not they who have flown in, it is Peter and Tinker Bell.

pp. 140-1

…ダーリング夫人が子供部屋に入ってピアノを弾き始めると、まもなくダーリング氏は眠りに落ちた。そして彼が眠っている間に、ウェンディとジョンとマイケルが部屋に飛び込んで来たのだった。

いや、違う。確かにそう書いてしまったが、それは我々が船を離れる時に子供達がそのように決めていたからだ。しかしその後で、何か変更がなされたに違いない。何故ならば飛び込んで来たのは、ウェンディとジョンとマイケルではなく、ピーターとティンカー・ベルだったからだ。

これまでもいくつかの場面で示されていたように、原作 *Peter and Wendy* においては作者のナレーションを活用して、物語世界を構築する語りが複数の平行記述<sup>ii</sup>を通して提示されていたのであった。物語世界の実質が、語り手と聴き手の思念がストーリーの枠組みを選択的に確定することを許す、不定形の描像の形で与えられていたのである。この特質は原作 *Peter and Wendy* の仮構存在としての属質を定義づける、メタ特性と看做されるべきものでもあった。そして上の場面を導入して作者が改めて選び直したとされるストーリーにおいては、ピーターはウェンディに先回りをしてダーリング家の窓を閉め、残酷にも彼女の帰還を阻害しようと企んでいるのである。<sup>iii</sup>ピーターは万人の憧れの対象となる理想像であるが故に、決して確定した人物像を具現化して形成し得ないパラドクスであった。しかしピーターにまつわるこのダークヒーロー的“偏差”の感覚こそが、原作 *Peter and Wendy* においては欠かせない重要属質だったのである。この事実を反映して、さらに後日談として語られた現実の世界に回帰したウェンディの許に現れたピーター・パンの姿は、原作 *Peter and Wendy* では以下のように記述されているのである。

She had looked forward to thrilling talks with him about old times, but new adventures had crowded the old ones from his mind. “Who is Captain Hook?” he asked with interest when she spoke of the arch enemy. “Don't you remember,” she asked, amazed, “how you killed him and saved all our lives?” “I forget them after I kill them,” he replied carelessly. When she expressed a doubtful hope that Tinker Bell would be glad to see her he said, “Who is Tinker Bell?” “O Peter,” she said, shocked; but even when she explained he could not remember. “There are such a lot of them,” he said. “I expect she is no more.”

pp. 148-9

ウェンディは、以前二人の行った冒険について、わくわくするようなお話をピーターと共に語り合えるものと期待していた。しかし新しく経験した冒険が、彼の古い記憶を覆い隠してしまっていた。

「フック船長って、誰だい？」ウェンディが彼の仇敵のことを語った時、ピーターは大いに興味を示して尋ねたのだった。「覚えていないの？」ウェンディは、愕然として聞き返した。「フック船長を殺して、私たちみんなを助けてくれたでしょう？」「僕は、殺した奴らのことは忘れてしまうんだ。」ピーターは関心がなさそうに答えた。ティンカー・ベルがもう一度私に会って、喜んでくれるかしら、とウェンディが心配そうに言った時、ピーターは言ったのだった。「ティンカー・ベルって、誰だい？」「まあ、ピー

ター」ウェンディは、啞然として声をあげた。しかしピーターは、ウェンディがティンクのことを説明しても、思い出すことができないのだった。「妖精は、とても数が多いからね。」ピーターは言った。「多分、ティンクは、もういないんじゃないかな。」

ピーターは最後まで人の心を本当に満たしてくれることの決してない、どこか違和感に満ちた危うい理想郷の残響なのである。異教神パンの復活は、頑迷なキリスト教的教義からの人間精神の解放に寄与する以上に、人間文化が築きあげたギリシア文明的ロゴスの解体をもたらしてしまったのであった。そしていかなるリアリスティックな仮構よりもさらに苛酷な主題性を秘めた、陥穽に満ちたダーク・ファンタシーである原作*Peter and Wendy*を締めくくる終結部分は、以下のように作者によって語られている。

As you look at Wendy, you may see her hair becoming white, and her figure little again, for all this happened long ago. Jane is now a common grown-up, with a daughter called Margaret; and every spring cleaning time, except when he forgets, Peter comes for Margaret and takes her to the Neverland, where she tells him stories about himself, to which he listens eagerly. When Margaret grows up she will have a daughter, who is to be Peter's mother in turn; and thus it will go on, so long as children are gay and innocent and heartless.

p. 154

ウェンディの姿をみていると、彼女の髪が白くなり、その体が再び小さくなって行くのが分かるだろう。何故ならこれは皆、遠い昔に起こったことだからだ。ジェーンは今ではありふれた大人で、マーガレットという名の娘がいる。そして毎年春の大掃除の頃になると、忘れていない時には、ピーターはマーガレットのもとを訪れ、ネヴァランドへと連れて行くのだ。そこでマーガレットは、ピーターに彼自身のお話を聞かせてやる。ピーターは、熱心にそのお話に耳を傾ける。マーガレットが大きくなったら、娘ができることだろう。今度はこの子が、ピーターのお母さんになるのだ。こうしてずっと続いて行く。子供達が陽気で無邪気で非情であり続ける限り。

原作*Peter and Wendy*が開拓した特徴的な記述様式であった、お話の語りを通して具現化される想念の現象化作用という主題は、映画*Peter Pan*ではピーターの得意技であったmake-believeのゲーム的機構と同定される知的操作として、彼の仇敵キャプテン・フックが採用した心理戦において忠実な反映記述がなされていたのである。その替わりにこの映画作品の終結部分においては幸せな現実世界に復帰した迷子達の姿が描かれることにより、いかにも典型的なハッピーエンドが迎え入れられているかのように見えた。しかしながら興味深いことに、DVD版の映画*Peter Pan*においては、いくつかの“特典映像”が収録されているのである。そしてここには映画本編には無かったいくつかの平行記述に相当するシーンが用意されている。その中には、原作*Peter and Wendy*のエンディングの記述に相応すると思われるシーンもある。それは「もう一つのエンディング」と名付けられた一つの付加的な挿話である。

幼い娘のジェーンにピーター・パンのお話をしている、母親となったウェンディの姿がそこに描かれている。ウェンディは語る。「それが彼を見た最後だったの。」ジェーンに「悲しかった？」と尋ねられてウェンディは答えている。「いいえ。彼は忘れると分かったの。冒険が一杯あるから。」ジェーンが眠りについたところで、窓からピーターが子供部屋に入ってくる。しかしウェンディとピーターの久しぶりの再会は、かなりぎこちないものとなっている。ピーターは成長したウェンディを認めようとせず、短剣を引き抜いてベッドで寝ている彼女の娘を刺し殺そうとさえるのである。そこで目を醒したジェーンが、ピー



ターに問いかける。「ねえ、あなた。どうして泣いているの？」こうしてウェンディが始めてピーターと出会った夜と同様の場面が反復され、窓から空に飛び立っていくピーターとジェーンを窓辺で佇んで見送るウェンディの姿で、この挿話は締めくくられている。本体であるフックの孤絶した破滅の結果、影として分離生成したピーターの人格の統一の機会も失われ、仲間であったロストボーイズ達も“陳腐で醜悪な”現実世界に回帰してしまい、人々の想念の中に不毛な永劫回帰として封印されるしかなかった理想郷の残滓である神格の物語がこうしてDVD収録のギミックを用いた“平行記述”の中に語られているのである。

20世紀初頭における原作 *Peter and Wendy* の出版の際においては、アインシュタインの相対性理論発表前夜の輻輳した時代精神を反映して、未だ定式化されていなかった量子的存在解釈を先取りした原形質記述の試みを具現したメタフィクションの技法は、21世紀に至っては様々のアニメやゲーム作品を通じて、むしろ一つの完成された仮構表現の規範を形成するに至っている。量子論理を適用した全体性の世界解式を活用した仮構記述の発端と完成形を例証することになっていたのが、原作と映画版に分岐してそれぞれに現象化したピーター・パンのお話だったのである。

## テキスト

映画 *Peter Pan* からの台詞の引用は、ソニー・ピクチャーズエンタテインメントのDVD『ピーターパン』（2009年）を出典として用いる。

原作 *Peter and Wendy* のテキストとしては、筆者が注釈を施した *Annotated Peter and Wendy*（近代文藝社、2006年）を用いる。

## 註

- i 原作においては、ピーターの“存在の謎”は取り分け重要な主題を形成するものとなっていた。ピーターとは、未婚の女性達や若いお母さん達の顔の上に窺われる特有の表情に類した何かとして話し手に語られていたのである。比喩表現の一種と目されていた言説がそのまま実体性を獲得し、意思性と肉体性を備えた固有の存在物として具現化したことを暗示する記述である。机上の空論に属する観念遊戯の所産とも、観念空間にのみかろうじて意味性を主張する危うい観念の結晶体とも看做し得るのが、ピーターの本質的属性である。他の暗示的な記述を総合して量子理論の発想を踏まえた現代的描像を当て嵌めた謎解きを行うならば、“反省的自意識の持ち主である教養人キャプテン・フックから分極生成した影”という解式が得られることになる。
- ii 原作 *Peter and Wendy* に導入されている分岐ストーリーを暗示する典型的な平行記述は、以下のようなものであった。ネヴァランドにおける子供達の様々な冒険を紹介するにあたって、語り手はいくつかのエピソードを用意していると語る。けれどもその全てを語るには、英語・ラテン語辞書かラテン語・英語辞書くらいの分厚い本でなければ無理だと語り手は述べる。(p. 119) として物語られるべきエピソードの候補をいくつかあげてみた後、語り手はさらにこう続けるのである。  
 ... but we have not decided yet that this is the adventure we are to narrate.... (p. 120)  
 けれどまだ私たちはお話をこのことにすると決めた訳ではありません。  
 そして語り手はまだ決心をつけかねるように、海賊達が子供達を罠にかけようとしてケーキを焼いた話や、ピーターのお友達の鳥の巣が海に落ちた時ピーターが救ってやった話などのことを語ってみようかと持ち出す。しかし語り手が実際にこれから読者に語るエピソードはこのようにして恣意的に決定されることになる。  
 Which of these adventures should we choose? The best way will be to toss for it. I have tossed, and the lagoon has won. (p. 121)  
 これらの冒険のうち、どれをお話したらよいのでしょうか？一番いいのはコインを投げて決めることです。コインを投げてみました。そして礁湖のお話選ばれました。
- iii 映画 *Peter Pan* では、原作において平行記述の印象を強調して語られていたこのエピソードを、本編のストーリーとして活用している。ウェンディと最初に仲違いをして“愛情”の気持ちを否定した直後、ピーターが一人でダーリング家におもむいて、二度とウェンディが戻ることができないようにダーリング夫人が開け放しておいて窓を閉めようと画策する場面が描かれているのである。

黒田 誠（和洋女子大学 人文社会科学系 准教授）

（2014年10月14日受付）